

201029018A

国内外のHIV感染症の流行動向及び リスク関連情報の戦略的収集と統合的分析 に関する研究

厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業

平成 22 年度

総括・分担研究報告書

2011

平成 23 年 3 月 (2011) 主任研究者 木原 正博

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業

国内外の HIV 感染症の流行動向及びリ スク関連情報の戦略的収集と統合的分 析に関する研究

平成22年度総括・分担研究報告書

平成23年（2011年） 3月

主任研究者 木原 正博

京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

氏 名	所 属	職 名												
HIV流行関連情報の集約的分析に関する研究 研究代表者 <table data-bbox="509 365 632 483"> <tr><td>木原 正博</td></tr> <tr><td>木原 雅子</td></tr> <tr><td>森重 裕子</td></tr> <tr><td>加藤 秀子</td></tr> </table>	木原 正博	木原 雅子	森重 裕子	加藤 秀子	京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野 京都大学大学院医学研究科社会疫学分野	教授 准教授 研究員 研究員								
木原 正博														
木原 雅子														
森重 裕子														
加藤 秀子														
性感染症患者のHIV感染と行動のモニタリングに関する研究 研究分担者 <table data-bbox="509 577 656 954"> <tr><td>小野寺 昭一</td></tr> <tr><td>”</td></tr> <tr><td>尾上 泰彦</td></tr> <tr><td>南 邦弘</td></tr> <tr><td>前田 信彦</td></tr> <tr><td>赤枝 恒雄</td></tr> <tr><td>佐々木 寛</td></tr> <tr><td>吉尾 弘</td></tr> <tr><td>保科 眞二</td></tr> <tr><td>家坂 清子</td></tr> <tr><td>大原 宏樹</td></tr> <tr><td>澤村 正之</td></tr> </table>	小野寺 昭一	”	尾上 泰彦	南 邦弘	前田 信彦	赤枝 恒雄	佐々木 寛	吉尾 弘	保科 眞二	家坂 清子	大原 宏樹	澤村 正之	東京慈恵会医科大学 富士市立中央病院 宮本町中央診療所 札幌東豊病院 札幌東豊病院 赤枝六本木診療所 佐々木医院 吉尾産婦人科医院 保科医院 いえさか産婦人科医院 山の手クリニック新宿院 新宿さくらクリニック	客員教授 院長 院長 院長 院長 院長 院長 院長 副院長 院長 院長
小野寺 昭一														
”														
尾上 泰彦														
南 邦弘														
前田 信彦														
赤枝 恒雄														
佐々木 寛														
吉尾 弘														
保科 眞二														
家坂 清子														
大原 宏樹														
澤村 正之														
薬物乱用・依存者におけるHIV感染の実態とハイリスク行動についての研究 研究分担者 <table data-bbox="509 1059 632 1227"> <tr><td>和田 清</td></tr> <tr><td>石橋 正彦</td></tr> <tr><td>中村 亮介</td></tr> <tr><td>前岡 邦彦</td></tr> <tr><td>森田 展彰</td></tr> </table>	和田 清	石橋 正彦	中村 亮介	前岡 邦彦	森田 展彰	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 おおりん病院 東京都立松沢病院 瀬野川病院 筑波大学社会医学系精神衛生学	部長 院長 医師 副院長 講師							
和田 清														
石橋 正彦														
中村 亮介														
前岡 邦彦														
森田 展彰														
外国人薬物使用者等のHIV感染と行動のモニタリングに関する研究 研究分担者 <table data-bbox="509 1335 632 1361"> <tr><td>中村 亮介</td></tr> </table>	中村 亮介	東京都立松沢病院	医師											
中村 亮介														
海外のHIV/性感染症の流行とリスク情報の収集・分析に関する研究 研究分担者 <table data-bbox="509 1462 714 1491"> <tr><td>橋本(西村)由実子</td></tr> </table>	橋本(西村)由実子	関西看護医療大学看護学部	講師											
橋本(西村)由実子														

目次

I. 総括研究報告

国内外の HIV 感染症の流行動向及びリスク関連情報の戦略的収集と統合的分析に関する研究 ……木原正博・他 ……1

<個別研究>

国内外の HIV/STD 流行及び関連情報の集約的分析に関する研究

(1) 欧米の HIV/STD 流行の動向に関する研究 ……西村由実子・他 ……14

(2) 先進国における早期梅毒流行の再興とその背景要因について ……木原正博・他 ……83

(2) 近隣諸国・地域の HIV/STD 流行と出入国の動向に関する研究 ……西村由実子・他 ……96

(3) わが国の STI 流行及び妊娠中絶率等の動向に関する研究 ……木原正博・他 ……105

II. 分担研究報告

1. 性感染症患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 ……小野寺昭一・他 ……164

2. 薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 ……和田 清・他 ……175

3. 外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 ……中村亮介 ……193

III 研究成果の刊行に関する一覧表 ……196

平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
内外の HIV 感染症の流行動向及びリスク関連情報の戦略的収集と統合的分析に関する研究

総括研究報告書

主任研究者：木原正博（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野）

研究要旨

わが国における効果的かつ効率的な HIV 予防施策の推進に資することを目的として、①わが国の HIV 流行に関連する内外の二次情報のデータベースの構築と分析に関する研究、②リスクグループ（性感染症患者、薬物使用者）の HIV/STD 感染と行動のモニタリングに関する研究を実施した。

(1) 内外の HIV/STD 流行及び関連情報の集約的分析に関する研究（木原正博、橋本由実子）
本年度は、以下について最新情報を収集した。

1) 海外関係：①近隣諸国・地域（中国、台湾、韓国、香港）の HIV/AIDS 及び性感染症(STD)に関するサーベイランス情報（～2009 年）、②主要先進諸国（米、英、独、仏、加、豪）の HIV/AIDS 及び性感染症(STD)に関するサーベイランス情報（～2009 年）

2) 国内関係：①日本の性感染症(STD)に関するサーベイランス情報（～2008 年）、②その他の行政統計（母子保健統計、薬事工業生産動態統計、出入国管理統計、警察関係統計[薬物・風俗]）（～2008・09 年）、③他の HIV/STD 関連研究班の過去及び最新データ（～2009 年）
以上の情報に基づいて以下の分析を実施した。

1) 海外関係：①近隣諸国・地域における HIV/AIDS 報告数と感染経路別の年次推移、②主要先進国における HIV/AIDS 報告（診断）数と感染経路の年次推移、③先進国及び近隣諸国・地域における STD（クラミジア、淋病、梅毒）報告数の年次動向、④先進国における最近の梅毒流行に関する系統的文献レビュー。

2) 国内関係：①STD（クラミジア、淋病、性器ヘルペス、尖圭コンジローム、梅毒）報告数と年齢分布の年次推移、②妊娠中絶率の年次推移、国籍別入国者数・海外在住邦人の年次推移、③コンドーム国内販売数の年次推移、④風俗営業の業態別年次推移、⑤薬物事犯の年次推移。
以上の分析から以下の結果を得た。

a.近隣諸国・地域において、HIV/AIDS 報告数が増加してきたがやや鈍化傾向が生じてきた。当初薬物静注の割合が大きい国もあったが、現在では全ての国・地域で主たる感染経路は性感染に移行している。

b.主要先進諸国では、AIDS 患者報告数は、1990 年代半ば以降減少を続けているが、HIV 感染者数は、2000 年代に入って、ほとんどの国で増加に転じ、2004、5 年からは横ばいあるいは微増となった。2009 年には減少した国もある。HIV 報告の中では、薬物静注は低値で横ばいを続けているが、同性間感染が 2000 年以降再び増加し始め、異性間感染は、英国、フランスで減少傾向にあるが、それ以外の国では増加もしくは横ばいである。性感染症は全般に増加しており、性器クラミジアと淋菌感染症は若者、梅毒は男性とセックスをする男性（MSM）で多いといった疾患ごとの特徴が認められた。また、先進国では、HAART の普及による HIV 感染者の蓄積が進行し、HIV 感染の社会的負荷が増大を続けている。

c.先進国の梅毒流行の系統的レビューからは、HAART 導入直後から、先進国の大都市で一斉に MSM における梅毒のアウトブレイクが始まり、その背景に、インターネットの普及、治療の進歩による楽観論、エイズキャンペーンの低下、性行動の再無防備化などが指摘されていた。

d.特に近隣諸国との間で、HIV 流行が流入・流出しやすい出入国動向が継続している。

d.わが国の性に関する指標は現在複雑な変化をしている(細菌性 STD 減少、ウイルス性 STD 増加[最近微減]、梅毒増加、妊娠中絶減少、コンドーム国内出荷量減少)が、梅毒増加は先進国同様 MSM に関連していると考えられ、その他の STD 減少や中絶減少は、異性間性行動におけるコンドーム使用以外の行動変容(性活動遅延やパートナー数減少)が関与している可能性が示唆された。

e.性産業の増殖や麻薬使用の蔓延が依然継続していることが示唆された。

以上、HIV や STD 流行の国際的動向とその背景に関するデータの収集と分析が進み、また、国内の HIV/STD 流行や関連情報の分析から、わが国の HIV 流行に関する文脈的理解が深まった。これらの情報の一部は Web サイト (<http://www.aidssti.com>) に公開した。

(2) 性感染症患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究 (小野寺昭一)

STD クリニック受診者について、全国 9 つの STD 治療施設を受診した合計 557 例の受診者(男性 263 例、女性 144 例、風俗営業女性 150 例)について、無料の HIV 検査と HIV 検査ニーズに関する簡易アンケートを依頼し、同意の上調査した。その結果、男性受診者中 4 名(1.5%)に HIV 陽性者を認め、男性受診者の HIV 感染率は、2006 年以来、2%前後で推移している。アンケート回答者のうち、HIV 検査目的以外で受診した例は、男性外来患者 70%、女性外来患者 77%、CSW25%であったが、これらのうち、無料検査希望者は、80-99%と高率であり、検査を受けたい場所としては、当該クリニックもしくはどこでもよいと答えた人は、82-93%に上り、STD クリニック受診者の間に高い HIV 検査ニーズがあることが示された。

(3) 薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (和田 清)

薬物乱用者・依存者について、94 年以來の調査を行い、入院薬物中毒患者の推定 13%をカバーする全国 4 医療施設の新規対象者(n=125)と、6 自助グループの新規対象者 73 人を分析対象とし、HIV、梅毒、B/C 肝炎感染率、注射行動、性行動を調査した。HIV 感染者は認められなかったが、30%以上が HCV 抗体陽性であった。この 10 数年間の傾向として、入院患者と自助グループとともに、注射共有率は漸減傾向にあるが(2010 年で約 15%)、HCV 感染率や注射経験率はここ数年増加傾向に転じており注意が必要である。セックスワーカーとの無防備な性行動が少なくない傾向に変わりがないことを確認した。

(4) 外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究 (中村亮介)

首都圏某公立精神科病院に薬物使用等で入院となった 20 カ国の外国人患者 43 人(男 18、女 25)を対象として、対象者の同意の下に調査用紙によるリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査、ないしは診療録からの転記調査を実施した。本年度は HIV 陽性者を認めなかった。風俗営業に従事する女性が 20%に認められた。

以上、データ収集と分析、モニタリングについて、計画通りに研究を実施した。

1. 研究の分担

●内外の HIV/STD 流行及び関連情報の集約的分析に関する研究

木原正博(京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野 教授)

橋本由実子(関西看護医療大学看護学部、講師)

●性感染症患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究

小野寺昭一(東京慈恵会医科大学医学部

泌尿器科 教授)

●薬物乱用・依存者の HIV 感染率と行動等のモニタリングに関する研究

和田 清(国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部 部長)

●外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究

中村亮介(東京都立松沢病院精神科医長)

2. 研究目的

①HIV/STI 流行やそれに関連する内外の二次・一次データの網羅的な収集によるデータベースの構築と分析、②流行の推計・予測に関する数理モデルの構築、③Web サイトによる情報公開・発信を通して、わが国における効果的かつ効率的なエイズ施策の形成・普及啓発に資することを目的とする（図）。

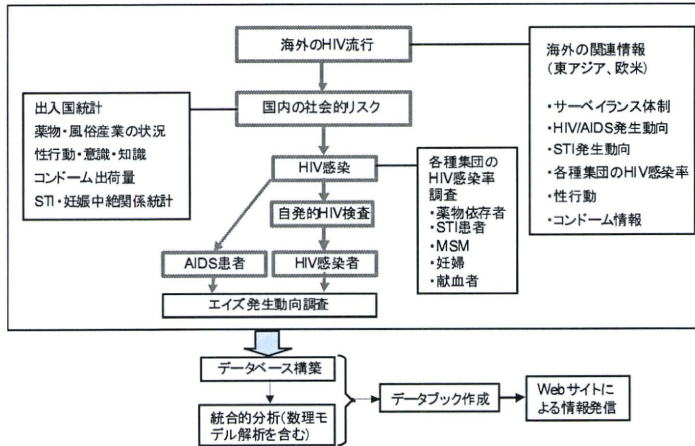


図. 研究の目的と構成

3. 研究の戦略的意義

東アジアにおける HIV 流行の本格化により、わが国における HIV 流行の一層の加速・拡大が懸念されることから、適時で効果的かつ効率的な HIV 予防施策の実施は国家的に緊要の課題となっている。そのためには、状況分析に必要なデータを収集・分析して、総合的に評価し、それに基づいて、施策を立案・実施することや情報をわかりやすく社会に発信して、世論形成を図ることが不可欠である。しかし、わが国のエイズ対策は長年こうしたプロセスが不十分なまま対策が行われてきた。本研究は、その弱点を補い、将来にわたる状況分析、施策評価の基盤を整えるという、国家レベルでの戦略的意義がある。

4. 研究方法及び結果

(1)内外の HIV/STD 流行及び関連情報の集約的分析に関する研究

わが国の流行の展望や対策の必要性を的確に判断するには、関連情報を可能な限り収集し、総合的に分析・解釈することが必要であるが、わが国にはそうした情報を系統的に収集分析する仕組みが存在していない。本研究では、これらの内外の情報を戦略的に収集・分析し、データベースを構築することを目的とする。

A. 海外の HIV と性感染症流行の状況に関する研究

(1)目的

わが国の HIV 流行に特に関わりが深いと考えられる海外諸国・地域における HIV 流行の動向を明らかにし、わが国の流行のおかれた国際的文脈を明らかにする。また、同じ性行動が背景となる性感染症（STD）の流行状況を国際比較し、わが国の HIV 感染リスクとその動向の特徴の分析に資する。

(2)研究方法

以下の機関の web サイトや関連部局への直接の問い合わせにより、HIV/AIDS 及び STD 報告数や推計値に関するデータを収集してデータベースを構築し、HIV/AIDS の感染経路別年次推移や STD の動向などを分析した。

<近隣諸国・地域>

●HIV/AIDS 及び性感染症

[中国]

- ・UNAIDS China Office 【英語】
- ・China HIV/AIDS Information Network (CHAIN) 【中国語、英語】
- ・National Center for AIDS/STD Prevention and Control, China CDC 【中国語、英語】

[台湾]

- ・Centers for Disease Control, R.O.C.(Taiwan) HIV/AIDS 統計 【英語】
- ・Centers for Diseases Control, R.O.C. (Taiwan) HIV/AIDS 情報 【中国語】

[香港]

- ・Virtual AIDS Office of Hong Kong, Department of Health, The Government of the Hong Kong Special Administrative Region 【英語】

[韓国]

- ・韓国 CDC AIDS 情報網【韓国語、英語】

<欧米諸国>

●HIV/AIDS

[米国]

- ・疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention: CDC)

[カナダ]

- ・カナダ公衆衛生局 (Public Health Agency of Canada: PHAC)

[オーストラリア]

- ・国立 HIV 疫学・臨床研究センター (National Centre in HIV Epidemiology and Clinical Research: NCHECR)

[英国]

- ・健康保護局 (Health Protection Agency: HPA)

[フランス]

- ・国立公衆衛生監視研究所 (Institut de Veille Sanitaire: InVS)

[ドイツ]

- ・ロベルト・コッホ研究所 (Robert Koch Institut: RKI)

- ・連邦健康モニタリング・システム (Federal Health Monitoring)

[ヨーロッパ全体]

- ・WHO ヨーロッパ地域事務所 Centralized information system for infectious diseases (CISID)

- ・HIV/AIDS Surveillance in Europe (EuroHIV: 2007 年までフランス国立公衆衛生監視研究所内)

- ・European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC: 2008 年より欧州共同体の HIV/AIDS サーベイランス担当)

●性感染症

[米国]

- ・疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention: CDC)

[カナダ]

- ・カナダ公衆衛生局 (Public Health Agency of Canada: PHAC)

[オーストラリア]

- ・保健・高齢者担当省 (Department of Health and Ageing)

[英国]

- ・健康保護局 (Health Protection Agency: HPA)

[ヨーロッパ全体]

- ・欧州共同体性感染症サーベイランス (European Surveillance of Sexually Transmitted Infections: ESSTI)
- ・WHO ヨーロッパ地域事務所 Centralized information system for infectious diseases (CISID)

(3)結果・考察

<近隣諸国・地域>

1) 中国

中国については、公的ルートの情報収集が困難であったため、HIV 疫学研究者のネットワークを介して情報を入手した。

中国では、1985 年の最初の報告以来 2009 年 9 月末現在で、累計報告数は、HIV 感染者 315,630 件、AIDS 患は 100,185 件、AIDS 死亡 48585 件である。

これらの報告件数中、最も多いのは、IDU 次いで、売血感染であるが、売血感染については、現在では、新規感染を完全に抑制されている。2009 年の新規感染では、3 分の 2 を性感染が占めており、感染ルートは性感染に移行している。

最近では、新規感染の推計も行なわれており、2009 年までの推計 HIV 感染数の累計は 740,000 人である。新規感染は、2005 年 70,000 人、2009 年 48,000 人と減少傾向にあることが示唆されている。しかし、特定のグループ (特に MSM) や地域において、高い感染割合が報告されており、油断できない状況にある。

2) 台湾

台湾における 2009 年の新規 HIV 感染報告は 1580 件、エイズ 875 件である。HIV 感染報告数は前年より減少しているのに対し、AIDS 報告は増加している。2005 年をピークとした IDU における HIV 感染爆発はひと段落したが、その影響が遅れて AIDS 発症の増加として出始めていると推測される。

感染経路別の動向をみると、HIV 感染については、男性同性間性行為による感染のみが前

年と比べて増加しており、2009年では1050件報告されている。AIDS症例の感染経路別データでは、性行為による感染の報告は前年同様だが、IDUおよびその他において増加した。

年齢別では、HIV、AIDSともに20代、30代が中心であるが、ここ数年の特徴は、20代以下の若い世代の割合が増加していることである。

性感染症については、2009年の梅毒および淋病の報告数は、2008年に比べ増加している。梅毒に関しては、2003年以降一定して増加傾向にある。淋病については、前年比では増加しているが、ここ5年ほどほぼ横ばいあるいは微増の状態である。今後、これら性感染症の報告数の変化を説明する背景情報を集め、HIV/AIDS流行の動向と合わせて、総合的に理解していく必要があるだろう。

3) 香港

香港では、2009年の報告数はHIV 396件（2008年は435件）、AIDS 93件（2008年は96人）と、前年と比べて減少している。1984年に最初のHIV感染が報告されて以来、増加を続けてきたが、2009年は感染拡大の勢いが鈍化した可能性もある。

2009年の新規報告の内訳は、男性77.8%、中国系62.1%、年齢平均は36歳である。感染経路の内訳をみると、主な感染経路は性行為で、異性間性行為が27.3%と同性間/両性間性行為が40.9%である。IDUにおける感染は、2009年のみでは3.5%と昨年より減少している。感染経路がわからないケースが増加しており、全体の4分の1を占めるに至っている点は懸念事項である。年齢別の内訳では、昨年に引き続き、40代以上での報告の割合が増加傾向にある。

性感染症については、NGU/NSGIが2002年から2007年まで減少を続けたが、その後横ばいとなっている。その他の性感染症については、2005年以降大きな変化はない。

4) 韓国

韓国では、HIVとAIDSを分けた統計が利用できないという限界があるが、2009年には、713件のHIV/AIDSが報告された。これは、前年の743件より若干の減少である。

感染経路別のHIV/AIDS報告数では、その

他と分類されている感染経路不明のケースが最も多く、2番目に多いのが男性異性間性行為、その次が男性同性間性行為となっている。IDUの報告は、2009年も0件である。

韓国の年齢別HIV/AIDS報告数の年次推移については、大きな変化はないが、2009年は39歳以下の若者からの報告がやや増加した。

性感染症については、2009年は、クラミジアと淋病のサーベイはなされなかったため、梅毒のデータのみ入手した。梅毒に関して、2006年以降、報告数に大きな変化はみられない。

以上より、近隣諸国・地域では、中国、台湾では、一時期IDUによる感染が、大きな割合を占めたが、性感染（同性間、異性間）に移行し、東アジア全域で、HIV流行は性感染を主体とするものとなった。

<欧米諸国>

●HIV/AIDSの状況

1) 米国

米国のHIVサーベイランスは、大幅な見直しが行われ、2008年までの集計が、2010年6月にHIV Surveillance Reportとして発表された。この報告書では、それまで長年使われていた報告年ベースの集計をやめて、診断年をベースとする変更が行われている。

40州からの名前をベースにした匿名検査報告 confidential name-based reporting に基づくその報告によれば、2009年の10万人あたりのHIV感染診断の発生率は17.4である。HIV感染全体としては大きな変化はない。年齢区分では、2006年から2009年の間に15-19歳、20-24歳、55-59歳の世代からのHIV感染診断が増えた。性別では、2009年の新規感染診断のうち76%を男性が占めている。2006年から2009年の経年変化では、女性における感染率は減少傾向である。感染経路別では、MSMにおけるHIV感染診断の数が増加傾向であり、2009年のみでは、同性間性行為による感染が57%、異性間性行為による感染が31%で、性感染が全体の87%を占める。

一方で、2009年のAIDS診断の発生率は人口10万人当たり11.2である。もっとも多い年代は40-44歳で10万人あたり27.1であった。性別では、成人若者男性におけるエイズ発生は

20.6、女性では 6.7（人口 10 万人当たり）であった。

また、2008 年時点で、HIV 診断を受けて生存している人の推計数は、人口 10 万人当たり 276.5（人数で約 87 万人）で、AIDS 診断を受けて生存している人の数は、479,868 人である。

2) カナダ

2008 年 12 月までの累積 HIV 感染者報告数は 69,844 件である。2009 年には 2,417 件が報告され、前年比 8.3%減少した。2009 年の HIV 感染者中、女性は 26.0%であった。年齢区分では、30～39 歳が最大で約 30%を占めるが、40 歳以上が徐々に増加している。感染経路では、MSM の割合が最も多く 41.8%、異性間感染 30.7%、IDU 21.6%である。

2008 年 12 月までの累積 AIDS 患者報告数は 21,681 件で、2009 年中には 224 件が報告された。2009 年の AIDS 患者中、19.2%が女性であった。年齢区分では、40-49 歳最大で 38.8%を占める。感染経路については、2009 年の男性 AIDS 報告のうち 43.6%が MSM で、IDU および異性間性行為はそれぞれ 24.4%を占めた。女性 AIDS 患者では、52.4%が異性間性行為、42.9%が IDU であった。

全体として、カナダにおける HIV/AIDS 流行は、前年より若干報告数は減少したが、女性の若年層、アボリジニー系、40 歳以上層においては増加している。また、感染経路としては、MSM が最も多く、異性間性行為と IDU がそれに続くが、黒人系では異性間性行為、ラテン系では MSM、アボリジニー系では IDU と人種により、リスクパターンが異なっている。

3) オーストラリア

2009 年 12 月 31 日現在、累計 29,395 件の HIV 感染、10,446 件の AIDS 症例、6776 件の AIDS 死亡が報告されている。2009 年末における生存 HIV 感染者は推計 20,171 人である。2009 年の HIV 新規感染報告は 1050 件である。感染経路としては、同性間感染が最も多いが、アボリジニー等少数民族では、異性間性行為や IDU の割合が高い。また、2005 年から 2009 年の異性間感染例 1,185 件のうち、58%は高感染率の国からの移民やそのパートナーであった。

4) 英国

2009 年末現在における生存 HIV 感染者数は 86,500 人で、その約 4 分の 1 が、自分の感染を知らないと推定されている。2009 年の HIV 新規感染は、6,630 人（男性 4,400 人、女性 2,230 人）で、2005 年の 7,982 人以来減少傾向である。感染経路としては、約 54%が異性間、42%同性間感染と考えられる。異性間性感染が 2004 年以降現象傾向にあるのに対し、同性間感染は高い状態で維持されている。IDU による感染は低率である。

2009 年の異性間感染例中 63%は、アフリカ系黒人で、そのうち 68%は主にサハラ以南アフリカ国出身者である。異性間感染者の割合は、2007 年の 24%から 2009 年は 32%まで増加している。また、2009 年に HIV 感染の診断を受けた MSM のうち 83%は、英国国内で感染している。

5) フランス

2009 年には、3,274 件の新規 HIV と 536 件の AIDS が報告されているが、これは暫定値であり、報告遅れが補正されれば確定値はこれより多くなる。この暫定値を感染経路別でみると、異性間感染が 36.5%、同性間感染が 23.2%となっている。IDU における感染は 1%以下と低い。ただし、この暫定値においては、感染経路不明が 4 割弱となっているので、注意が必要である。

6) ドイツ

2009 年にドイツ国内で報告された HIV 感染者数は、2856 人（男 2377 人、女 461 人）で、AIDS 症例は 184 件である。

HIV 感染報告は、2002 年から同性間、（HIV 流行国出身者を除く）異性間感染、感染経路不明、女性の HIV 流行国出身者で増加に転じた。特に同性間感染は増加速度が速く、2002 年から 2006 年で報告数は約 2 倍となった。年齢別では、男性の 30 代で最も多く 40 代、20 代と続くが、2002 年以降、この 3 つの年代で急速に増加している。

AIDS 患者報告は、1990 年代初頭を境に減少し続けている。2006 年のデータでは、女性では HIV 流行国出身者が最も多い(51%)が、感染経路不明も多く、男性で 26%、女性で 29%を占めている。

以上先進国では、多剤併用療法の影響により、AIDS 患者報告数は減少したが、累積感染者数が増大しつつある。HIV 感染者については、21 世紀に入って、移民感染者の流入と国内での感染による異性間感染報告数に増加が見られる国があり、また同性間感染はほぼ全ての国で増加した。

以上の分析から、欧米では流行が性感染により再燃し感染者の蓄積が進むという憂慮すべき状態にあること、近隣諸国では、人口比で見た場合、わが国をしのぐ流行が展開していることが明らかとなった。

●STD の状況

性器クラミジア報告数は、米、英、カナダ、オーストラリアで 1990 年代後半以降、激増している。これは、スクリーニングの普及による部分もあるが、流行自体の拡がりにもよることが示唆されている。淋病は、米国では 1990 年代後半以降横ばいで、カナダ、オーストラリアでは、1990 年代後半以降漸増している。梅毒は、米、英、カナダでは、2000 年以降、オーストラリアでは、2004 年以降から増加に転じた。

このように、欧米では、近年 STD 流行が再燃しており、HIV の性感染流行を裏打ちする事実となっている。

B.先進国における梅毒流行に関する系統的文献レビュー

(1)目的

先進国における梅毒流行の背景や HIV 流行再燃との関連を明らかにすること。

(2)方法

1990 年 1 月 1 日から 2010 年 6 月 30 日までの関連文献を PubMed で網羅的に検索し（検索ワード=syphilis, epidemic）、ヒットした 56 文献の内容を系統的に整理・分析した。

(3)結果と考察

1997 年以降、ほとんどの先進諸国において、同時多発的な早期梅毒のアウトブレイクが観察されていたことが明らかとなった。この流行には、感染者の大半（70・80%）が男性とセックスをする男性（MSM）であること、MSM 症例中における HIV 感染率が高い（約 50%）ことなど、それ以前の梅毒流行とは全く異なる

特徴があり、流行は、大都市の壮年～中年層の MSM が中心であった。この流行の背景には、HIV 感染症に対する多剤併用療法の導入による予後改善や楽観論、エイズ予防キャンペーンの停滞やキャンペーンに対する無視や予防疲れ、インターネットによる性的ネットワークの拡大やレクリエーションドラッグ使用の蔓延など、以前とは異なる要因による無防備な性行動の復活が指摘されている。我が国の梅毒報告数も、近年、他の性感染症（性器クラミジアや淋菌感染症）とは正反対の動向を示して増加しており、同性間感染による流行であることが強く示唆され、同性間の HIV/STD 感染リスクが高まっている可能性が示唆された。

C.わが国の HIV 感染に関連する社会的状況に関する研究

(1)目的

わが国の HIV 流行の動向を左右すると考えられる情報を収集・分析し、わが国の HIV 流行に対する社会的脆弱性の態様と動向を明らかにする。今年度対象とした情報は、①出入国の動向、②性感染症や 10 代の妊娠中絶率の状況、③コンドームの国内出荷量の動向、④風俗営業の状況、⑤薬物蔓延の状況である。

(2)方法

- 1) 出入国データは、①出入国管理統計（法務省）、②観光白書、③海外在留邦人数統計（外務省）より獲得し、外国人入国者および日本人出国者数、不法残留者数、日本人海外長期滞在者数について現状と年次推移を分析した。
- 2) 性感染症データは、厚生労働省の感染症発生動向調査から検索し、疾患別、年齢別の動向を分析した。
- 3) 10 代の中絶率のデータは、母子保健の主なる統計の平成 3 年版以降の報告書から抽出し、年齢別に分析した。
- 4) コンドーム出荷量については、薬事工業生産動態統計よりデータを得た。
- 5) 風俗営業の営業軒数や覚醒剤の押収量の年次推移に関しては、平成 16 年来の警察白書からデータを抽出した。

(3)結果・考察

1) 出入国の状況

2009年は、外国人入国者数（再入国者を含む）が約758万人と、前年比17.1%の大幅な減少となった。原因として、平成20年9月のいわゆるリーマンショックを契機とした世界的な景気後退、円高基調の継続、新型インフルエンザの発生などにより、観光やビジネスを目的とした渡航を手控えようとする傾向が続いたことがあげられる。

出身地別では、入国者が最も多いのが、韓国であることは、前年と変わらないが、2番目に多い地域として、中国が、（中国）台湾を抜いて躍り出た。入国者が多い韓国、中国、中国（台湾）、米国、中国（香港）のうち、4カ国は前年比大幅減であるのに対し、中国のみ前年比2%増である点が注目される。

一方、不法残留者については、2010年1月1日現在で、最も多いのは韓国（2万1660人）であるが、前年比約25%減少した。日本に入国する外国人の数は、毎年増加しており、2008年では、約914万6千人で、前年に比べて約6千人減少した。同年の出国者数は約1,599万人で昨年度より減少した。

2009年の出国先は、中国が約332万人と前年同様1位であるが、韓国305万人と2番目躍り出て、米国の約292万人を上回った。ほぼ、すべての地域の訪問者数が前年比減少であるのに対し、韓国のみ前年比28.4%の増加となっている。

一方、3ヶ月以上の長期滞在者の数は、2009年10月1日現在、国別では、上位5カ国は米国、中国、英国、タイ、オーストラリアで、前年と変わらない。都市別では、1位は上海で変わらないが、2位がニューヨーク都市圏となり、ロサンゼルスを上回った。4位のバンコクまで、上位都市は前年比増だが、5位シンガポールでは、前年比減となっている。

2) 性感染症の状況

性器クラミジア感染症及び淋菌感染症は、1990年代半ばから増加を続けていたが、2003年以降、男女で10-40歳代で減少傾向が続いている。ただ、女性の淋菌感染症はほぼ下げ止まった。性器ヘルペスウイルス感染症及び尖圭コンジローマは、近年、微増傾向が続いてきたが、それぞれ2006年、2005年をピークに、減少に転じた。一方、梅毒は、これらの性感染症と

は全く逆に、2003年以降、増加傾向にあり、2007年には2003年の162%に達した。男性では20-40歳代で増加傾向が続き、女性では2006年以降は横ばいである。欧米の文献レビューから、この男性梅毒患者の増加は、同性間感染リスクの増加を反映する可能性が強く示唆された。

3) 10代の人工妊娠中絶の状況

10代の人工妊娠中絶は、1970年代から1980年代前半にかけて増加してその後平衡し、再び1990年代半ばから急増するというパターンを取っている。増加は2003年にピークを示し、その後減少してきたが、最近減速傾向が低下しつつある。こうした現象は、全国の都道府県でほぼ例外なく生じており、大都会を含む自治体でも含まない自治体間で全く違いが見られない。なお、20代前半、20代後半では、中絶の減少は、10代よりそれぞれ3年、4年遅れて生じているが、これはコホート現象の可能性がある。

5) コンドーム国内出荷量の動向

コンドーム国内出荷量は、1980年代から減少し、1990年代に入ってやや上昇したが、1993年以降は再び急速の減少を始め、1993年の6.8億個から2008年には2.47億個と64%も出荷数が減少した。

6) 性風俗産業

従来型の店舗型風俗産業（ソープランド、店舗型ファッションヘルス）が、10数年来ほぼ一定数（<2000軒）にとどまる一方、1999年にいわゆる風俗営業法が改定され、派遣型ファッションヘルスが届出認可されるようになったことに伴ってその数が激増しており、2005年で2万5千軒を超えた。2006年に、風俗営業法が再改定されて、認可要件が厳しくなり、かつ同一業者の重複届出が禁止されたために、登録数は、8,936件に激減したが、これは、真の減少ではなく、実際の業者数に近い数字だったに過ぎず、その後、2007年11,236軒、2008年13,093軒、2009年14,648軒と大きく増加しつつある。

7) 薬物使用

非合法薬物であるMDMA錠剤の押収量は、年によって大きく変動し、一定した動向は見ら

れないが、大麻等の検挙人数や、向精神薬押収量などが増加していること、検挙人員の半数以上が少年及び 20 歳代の若年層であり、また、検挙人員の 80%以上が初犯者であることから、引き続き注視が必要である。

以上の結果より、外国人と日本人の出入国および長期滞在を通しての交流の増加、そして、国内の性風俗産業における派遣型ファッションヘルスの激増や、薬物使用の蔓延といった様々な社会状況が存在することから、日本に HIV/AIDS 流行が拡大する素地が存在していることが示された。

一方で、わが国の性感染リスクについては、①梅毒以外の STD 報告数の減少（男女）、②梅毒報告数の上昇（男性）、③10 代の妊娠中絶率の減少、④コンドーム出荷量の減少という、一見相反する動向が観察されてきたが、本年度の先進国梅毒流行の系統的文献レビューから、男性梅毒患者の増加が、MSM における流行である可能性が高くなってきたことと、高校生の性交経験率が、10 代の妊娠中絶率の動向とほぼ一致する動きをしていることが確認されたことから、わが国の性感染リスクについて以下のような仮説が可能と考えられる。

- a. 同性間と異性間では、性感染リスクは全く相反する動向を示している。
- b. 同性間では、梅毒流行が示唆するように、性感染リスクが上昇している。
- c. 異性間では、梅毒以外の STD や人工妊娠中絶率の低下に支援されるように、性感染リスクが低下している。
- d. 異性間における性感染リスクの低下は、コンドーム使用増加によらないもの、すなわち①性行動開始の遅延あるいは②パートナー数の低下による可能性が高く、少なくとも①は、高校生の性交経験率の低下から支持される。

以上の議論が正しければ、同性間対策は一層に強化が必要であり、また、異性間対策については、学校教育の場における対策（ゲートウェイ対策）が効果を上げている可能性があり、その継続強化が求められる。

(2)性感染症患者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究

(1)目的

都市圏の STD クリニックを受診した患者（男性、女性、セックスワーカー[CSW]）を対象に HIV 感染の浸透度をモニタリングし、HIV 検査ニーズを把握する。

(2)方法

対象者は、症状を有して受診した外来患者及び定期検診のために受診した CSW とし、同意を得て HIV 抗体検査および HIV 検査ニーズに関するアンケート調査を行った。

平成 22 年 9 月 1 日から 12 月末日をサンプリング期間として連続サンプリングし、各医療機関に割り当てた数に達した場合はそこでサンプリングを打ち切った

(3)結果

集まった症例数は、HIV 抗体検査希望者は、男性外来患者 263 例、女性患者 144 例、検診目的の CSW150 例で合計 557 例、アンケート回答者は、男性外来患者 238 例、女性患者 172 例、検診目的の CSW134 例で合計 544 例であった。

HIV 抗体陽性者は、男性外来患者 4 名（1.5%）に認められ、そのうち 2 名は HIV 検査を目的として受診した患者、残り 2 名は、HIV 検査を目的とせず受診した患者であった。HIV 検査ニーズに関するアンケート回答者のうち、HIV 検査目的以外で受診した例は、男性外来患者 70%、女性外来患者 77%、CSW25%と、CSW で低かったが、これらの HIV 検査目的外受診者のうち、無料検査希望者は、80-99%、と高率であり、検査を受けたい場所としては、当該クリニックもしくはどこでもよいと答えた人は、82-93%に上った。受けたい検査としては、38-51%が即日検査をあげ、検査費用としては、無料希望者が 42-49%、保健適用希望者が 41-54%であった（重複回答あり）。

以上、本年度の研究から、以下の点が明らかとなった。

- ・ 男性外来患者の HIV 抗体陽性率は約 2%程度であり、昨年までと同じ傾向を確認した。
- ・ HIV 抗体陽性者は、HIV 検査目的受診者と HIV 検査目的外受診者で各 2 名と同数であり、HIV 検査目的外受診者に無料検査を提供することの意義が示された。
- ・ STD クリニック受診者の間には、非常に大

きな HIV 検査ニーズが存在し、無料検査を STD クリニックで行うことにより、HIV 検査促進を図ることができる可能性が示唆された。

(3)薬物乱用・依存者の HIV 感染と行動等のモニタリングに関する研究

(1)目的

薬物乱用・依存者における HIV/STD 感染の実態を把握し、あわせて、注射器注射針の使用実態、性行動等のリスク行動を調査することによって、薬物乱用・依存者に対する HIV 対策の基礎資料を収集する。

(2)方法

研究は「1.精神科医療施設に入院した薬物依存・精神病患者調査」(病院群)、「2.医療機関を受診していない薬物依存者調査」(非病院群)の2部門調査から成っている。各研究においては、対象者の同意の下で、調査用紙によるハイリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査、ないしは診療録からの転記調査を実施した。病院群は4施設の初回対象患者125人(検査経験者を含めると169人)を調べた。この4病院で、わが国の覚せい剤関連精神疾患患者全体の推定約13%は捕捉している。非病院群は6施設の初回検査者73人(検査経験者を含めると254人)を調査した。

(3)結果・考察

両群で HIV 抗体陽性者は認められなかった。病院群での覚せい剤関連患者では、HCV 抗体陽性率が 44.6%と高く、78%の者に、これまでに注射による薬物使用の既往(以下、注射の既往)があり、この1年間でも58%の者に注射の既往があった。

また、約64の者にシリンジ及び針の生涯共用経験があり、最近1年間に限っても、約15%の者にシリンジ及び針の共用経験があった。経年的には注射の1年経験率、注射針の1年共用経験率は低下を示しており、その背景には「あぶり」の普及があると推測される。しかし、過去1年間の注射経験率は、増加傾向に転じており、C型肝炎感染率の増加と併せて注意が必要である。

病院群における「あぶり」の経験率は2000年以降、高い割合に上るが、「あぶり」を行った理由としては、「好奇心」「注射は怖いから」

「気軽にできるから」の割合が高く、HIV 感染、C型肝炎感染が気になって「あぶり」を行った者は極めて少ない。「あぶり」は、HIV 感染と直接の関連はないが、その気軽さ及びファッションナブルな感覚から覚せい剤乱用自体を拡大させる危険があり、薬物乱用防止の視点からは決して歓迎される形態とは言えない。同時に、その気軽さ及びファッションナブルさから、性行動と結びつきやすい傾向が伺え、今後、薬物使用と性行動との関係に関する対応が必要である。

非病院群の覚せい剤関連患者での HCV 抗体陽性率は約 40%であり、病院群の 45%よりは低かった。しかし、この群での、過去1年間での注射経験率、C型肝炎感染率は、それぞれ上昇傾向にあるため、今後の動向が危惧される。

薬物乱用・依存者の HIV 感染は、注射行為のみならず、性行為による感染の可能性と重複していると考えられ、今後も、その両面から HIV 感染の実態を把握してゆく必要がある。

(4)外国人薬物使用者等の HIV 感染と行動のモニタリングに関する研究

(1)目的

精神科に入院となった外国人患者について薬物乱用の有無や注射器・注射針の使用実態、性行動等 HIV 感染に関わるハイリスク行動を調査することによって HIV 対策の基礎資料に供する事を目的とした。

(2)方法

研究では首都圏に位置する公立精神科病院に入院となった外国人精神疾患患者を対象として、対象者の同意の下に調査用紙によるハイリスク行動の聞き取り調査と採血による血清学的検査、ないしは診療録からの転記調査を実施した。

(3)結果・考察

①本年度は、20カ国43名人の入院があり、薬物乱用者が4名認められた。②2006年に2名の HIV 感染者が確認されたが、その後は、今年度も含めて、HIV 感染者は認められなかった。③「B型肝炎ウイルスのキャリア」2名、「C型慢性肝炎」2名、「梅毒の既往を示すも

の」4名が認められた。③ここ数年の傾向として「風俗業」に従事していた女性患者が目立つようになったが、その傾向は、本年度も同様であった。

薬物乱用・依存者の間に HIV 感染者が出現してから HIV 感染が蔓延するまでの期間は一般に 2 年程度である。流行は海外から侵入する可能性が高いことから、薬物使用を行う外国人患者を調査することは、今後の動向を予測する上でも重要である。

5. まとめと考察

本研究により、わが国の HIV 流行の状況・特徴・国際的文脈や社会的脆弱性の状況を明らかにするのに必要な情報収集の枠組みが完成し、これまで分散して存在してきた関連情報のデータベースを構築し、それに基づくわが国の HIV 流行の現状や展望について、総合的な分析と理解を行うことが可能となった。

本年度までの研究から、以下のことが明らかになった。

- ① 東アジアにおいて 2000 年代に入ってから HIV 感染者報告数が急増しており、近隣諸国の間では、人口比では、わが国を大きく上回る流行が進展していることが示唆される。
- ② 近隣諸国・地域との間の出入国数は近年特に増加しており、流行が流入・流出し易い状況が存在している。
- ③ 欧米諸国では、同性間感染による HIV 流行が再燃するとともに、異性間感染による流行も増加が続いている。また、HAART 療法の普及により感染者の社会的蓄積が進行している。性感染症も多くの国で増加している。HIV/STD の増加は高年齢層でも生じていることから、欧米では、リスクの高い性行動が広汎な年齢で増加し始めたことが示唆される。
- ④ わが国の性に関する指標は、梅毒以外の STD の減少、男性における梅毒の増加、10 代の妊娠中絶率の減少、コンドーム出荷量の減少など、一見相反する動向が同時に進行しているが、系統的文献レビューを含めた本年度の研究から、これらは、同性間リスクの増加、コンドーム非依存性の異性

間リスクの減少として解釈できる可能性が示唆された。

- ⑤ 「見えない」性産業（所謂”デリヘル”）の増殖と薬物使用の蔓延が進行している。
- ⑥ STD クリニックを受診する男性患者における HIV 感染率は、2006 年以来、数%とほぼ横ばいで推移している。また、STD クリニック受診者においては、非常に高い廉価 HIV 検査ニーズが存在する。
- ⑦ 薬物使用者の間では注射の共有率は減少傾向にあるが、1 年間の注射使用や C 型肝炎感染率は増加傾向に転じているため、今後のアウトブレイク発生の可能性について、注視が必要である。

このように、本研究によって、わが国の HIV 流行とそのリスクの状況の多角的分析が進み、国際比較によって、その国際的文脈や特徴の分析も進んだ。これらの分析結果は、わが国は、流行度の高い国々・地域に囲まれていること、欧米でも対策に苦慮していることから、わが国の状況に適した効果的な対策の確立・普及が急務であることを示している。

しかし、実際には、エイズ予防指針が存在するにもかかわらず、地域では、啓発や施策形成に必要なデータすら容易に入手できる状況になく、対策費も乏しい中、住民の啓発レベルは低レベルに留まっている。

本研究では、こうした状況に鑑み、情報提供のための Web サイトを開設し、情報発信を行った。同サイトは、Wikipedia にリンクされて、アクセス数が増加しつつあり、また、NGO や HIV/STD 専門家、またマスメディアの情報源として利用されていることから、啓発への貢献が期待される。

6. 自己評価

1) 達成度について

各種行政統計や研究班のデータの収集、薬物乱用・依存者および STD 患者の HIV/STD 感染率・行動調査をほぼ予定通りに達成した。かつ先進国の梅毒流行に関する系統的文献レビューから、我が国の梅毒流行の意味を明らかにし、我が国の性関連事象に近年生じていた複雑な動向を解釈することを可能とした。

2) 研究成果の学術的・国際的・社会的意義について

本研究は、①関連情報を総合的に提供することによる施策形成の促進、②流行のモデル化に推計・予測・シミュレーションによる施策の理論基盤の提供を通して、わが国におけるエイズ予防施策の推進に資するという点で、また、マスメディア等への情報提供は、停滞した報道の活性化につながる可能性があるという点で、新予防指針に基づくわが国の今後のエイズ施策の展開を支えるという重要な社会的意義がある。

3) 今後の展望について

・本研究で実施した HIV 関連データベースの構築は、普及啓発に関わる関係者のニーズが高く、データベースの継続構築と Web サイトの維持は、研究として継続されるべきである。

・薬物使用者と STD 患者の研究は、本来国家が実施すべきセンテネルサーベイランスに相当するものであり、継続が必要である。

・数理モデルについては、本年度作成した MSM モデルを用いたシミュレーションや医療経済分析に応用するとともに、異性間のモデル化を行う必要がある。

7. 結論

研究はほぼ予定通りに進行し、わが国の施策の形成や推進に必要な情報基盤、理論基盤の整備や施策分析を推進することができた。

8. 研究発表

[欧文原著]

1. Zamani S, Ono-Kihara M, Ichikawa S, Kihara M. Potential for sexual transmission of HIV infection from male injecting-drug users who have sex with men in Tehran, Iran. *Sex Transm Dis.* 2010 Nov;37(11):715-8.
2. Visrutaratna S, Wongchai S, Jaikueankaew M, Kobori E, Ono-Kihara M, Kihara M. Sexual behavior of Japanese tourists visiting Thailand a key informant approach. *J Pub Health Develop* 8:33-44, 2010.
3. Ono-Kihara M, Sato T, Kato H, Suguimoto-Watanabe SP, Zamani S, Kihara M. Demographic and behavioral

characteristics of non-sex worker females attending sexually transmitted disease clinics in Japan: a nationwide case-control study. *BMC Public Health.* 10:106, 2010

4. Zamani S, Radfar R, Nematollahi P, Fadaie R, Meshkati M, Mortazavi S, Sedaghat A, Ono-Kihara M, Kihara M. Prevalence of HIV/HCV/HBV infections and drug-related risk behaviours amongst IDUs recruited through peer-driven sampling in Iran. *Int J Drug Policy.* 2010 [Epub ahead of print]
5. Zamani S, Radfar R, Torknejad A, Alaei AB, Gholizadeh M, Kasraee F, Ono-Kihara M, Oba K, Kihara M. Patterns of drug use and HIV-related risk behaviors among incarcerated people in a prison in Iran. *J Urban Health* 87(4):603-16, 2010.
6. Zamani S, Vazirian M, Nassirimanesh B, Razzaghi EM, Ono-Kihara M, Mortazavi Ravari S, Gouya MM, Kihara M. Needle and syringe sharing practices among injecting drug users in Tehran: a comparison of two neighborhoods, one with and one without a needle and syringe program. *AIDS Behav.* 2010 Aug;14(4):885-90

[和文原著等]

1. 木原雅子、木原正博. 現代社会にはびこる「見えない精神的暴力」—その背景とし人間的つながりの希薄化. *現代のエスプリ* 511: 27-38, 2010
2. 木原正博、鬼塚哲郎、小野寺昭一、木原雅子、橋本修二. 世界的 HIV 流行の新局面 (ニューグローバルウェーブ) と日本. *日本エイズ学会誌* 12(2):41-45, 2010 年
3. 木原雅子、加藤秀子、木原正博. 新時代の HIV 感染症予防戦略. *臨床とウイルス* 38(4): 270-6, 2010 年
4. 木原正博、木原雅子. 日本の HIV 流行の現状と推計・予測及び今後の展望について. *公衆衛生* 74(11): 6-9, 2010 年
5. 木原正博. 社会と健康を科学するパブリックヘルス (1) 21 世紀の課題と *New Public*

health. 日本公衆衛生雑誌 57(12):
1094-1097、2010年

6. 木原雅子、木原正博. 社会と健康を科学するパブリックヘルス (2) ソシオ・エピデミオロジー (社会疫学) -その方法論的特徴と実践例について. 日本公衆衛生雑誌 58(1): 58-61、2010年

[著書等]

1. 木原正博、木原雅子訳. 疫学—医学的研究と実践のサイエンス 3版(Gordis L他著). メディカル・サイエンス・インターナショナル、東京、2010年
2. 木原雅子、木原正博. HIV感染予防と社会—複合予防と WYSH プロジェクト. 最新医学別冊「HIV 感染症と AIDS」. 最新医学社、大阪、2010年
3. 木原正博、木原雅子. エイズの流行—人間の安全保障を脅かす感染症. 地球環境学辞典、弘文堂、東京、2010.

[シンポジウム等]

1. 小野寺昭一. 我が国における性感染症サーベイランスの現状と課題. 日本性感染症学会第 23 回学術大会. 2010年 12月、福岡.
2. 和田 清: 薬物依存とは—日本の現状と求められる治療—. シンポジウム 2 薬物依存と HIV. 第 24 回日本エイズ学会学術集会. グランドプリンスホテル高輪. 2010.11.24.

平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）
国内外の HIV 感染症の流行動向及びリスク関連情報の戦略的収集と統合的分析
に関する研究班

海外の HIV/性感染症の流行とリスク情報の収集分析に関する研究

西村由実子¹、木原雅子²、木原正博²

¹ 関西看護医療大学看護学部

² 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻社会疫学分野

研究要旨

- 目的** 先進諸国の HIV/AIDS 及び性感染症の動向に関する既存の情報を収集・分析し、わが国のエイズ・性感染症対策の効果的・効率的な発展に資する。
- 方法** 昨年度構築した、先進国の HIV/AIDS 疫学情報データベースおよび性感染症疫学情報データベースに 2009 年分データを追加し、流行の動向を把握する。HIV/AIDS については、米国、カナダ、オーストラリア、英国、フランス、ドイツの 6 カ国、性感染症については、米国、カナダ、オーストラリア、英国の 4 カ国を対象とする。
- 結果** 全般的に、昨年度の結果を踏襲する傾向が観察された。すなわち、①エイズ報告数は 1990 年代半ばから後半にかけて多剤併用療法普及に伴い減少していること、②HIV 感染では MSM における再燃と HIV 流行国からの移民において異性間性的接触で増加していること、③性感染症は増加してきており、性器クラミジアと淋菌感染症は若者、梅毒は MSM で多いといった疾患ごとの特徴があること、が確認された。また、米国における HIV サーベイランス、英国における性感染症サーベイランスの体制が、強化・改善された。
- 結論** 日本と交流の盛んな先進国における HIV 感染症および性感染症流行の動向についての情報の 2009 年分のデータが追加され、データベースが一層充実した。HIV 感染症と性感染症の経年変化を継続してモニタリングすると同時に、よりよいサーベイランス体制についても検討していく必要がある。

A. 目的

わが国と交流の多い主な先進国における HIV 感染症及び性感染症流行の動向に関する情報を収集・分析し、モニタリングすることを目的とする。

B. 対象・方法

HIV 感染症については、米国、カナダ、オーストラリア、英国、フランス、ドイツを対象とし、性感染症としては米国、カナダ、オーストラリア、英国を対象として、各国の公的機関から出されている HIV/AIDS 及び性感染症に関する疫学情報

を、主にインターネットによって収集した。以下が参照した機関一覧である。

<HIV/AIDS 疫学情報参照機関>

1. 米国
 - 疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention: CDC)
2. カナダ
 - カナダ公衆衛生局 (Public Health Agency of Canada: PHAC)
3. オーストラリア
 - 国立 HIV 疫学・臨床研究センター

(National Centre in HIV Epidemiology and Clinical Research: NCHECR)

4. 英国
 - 健康保護局 (Health Protection Agency: HPA)
5. フランス
 - 国立公衆衛生監視研究所 (Institut de Veille Sanitaire: InVS)
6. ドイツ
 - ロベルト・コッホ研究所 (Robert Koch Institut: RKI) および連邦健康モニタリング・システム (Federal Health Monitoring)
7. ヨーロッパ全体
 - WHO ヨーロッパ地域事務所 Centralized information system for infectious diseases (CISID)
 - HIV/AIDS Surveillance in Europe (EuroHIV : 2007 年までフランス国立公衆衛生監視研究所内)
 - European Centre for Disease Prevention and Control (ECDC : 2008 年より欧州共同体の HIV/AIDS サーベイランス担当)

<性感染症疫学情報参照機関>

1. 米国
 - 疾病予防センター (Centers for Disease Control and Prevention: CDC)
2. カナダ
 - カナダ公衆衛生局 (Public Health Agency of Canada : PHAC)
3. オーストラリア
 - 保健・高齢者担当省 (Department of Health and Ageing)
4. 英国
 - 健康保護局 (Health Protection Agency: HPA)
5. ヨーロッパ全体
 - 欧州共同体性感染症サーベイランス (European Surveillance of Sexually Transmitted Infections : ESSTI)

- WHO ヨーロッパ地域事務所 Centralized information system for infectious diseases (CISID)

C. 結果

<HIV/AIDS>

1. 全般的な動向

先進国の全般的な状況としては、エイズ患者新規報告数の減少 (図 1) と HIV 感染者新規報告数の増加 (図 2) に特徴づけられる。多剤併用療法 (HARRT 療法) が導入された 1990 年半ばから後半にかけて以降、先進諸国では、エイズ患者報告数および、エイズによる死亡者数の減少が顕著である。また、HIV 感染は近年の MSM での流行と異性間性交渉による感染、とくに HIV 流行国からの移民での増加が顕著であったが、ここ数年、MSM での流行は変わらないものの、移民の感染件数は減少傾向を見せている。

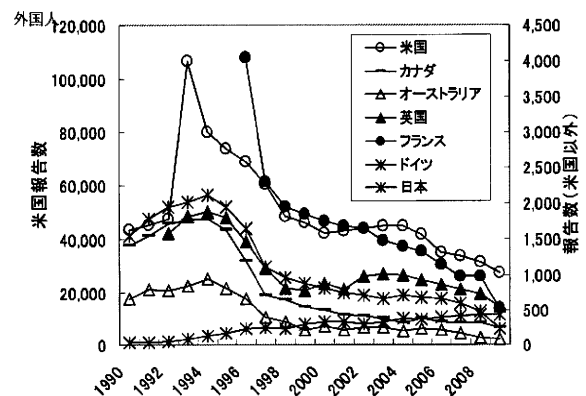


図 1. エイズ患者新規報告数国別年次推移

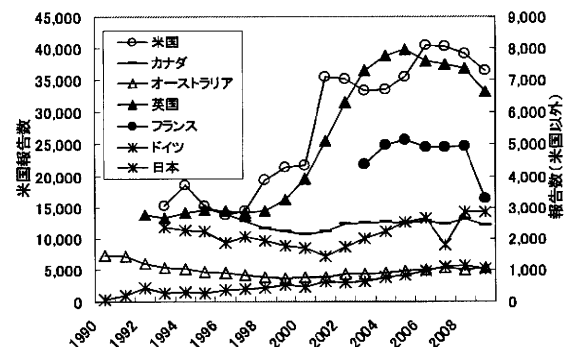
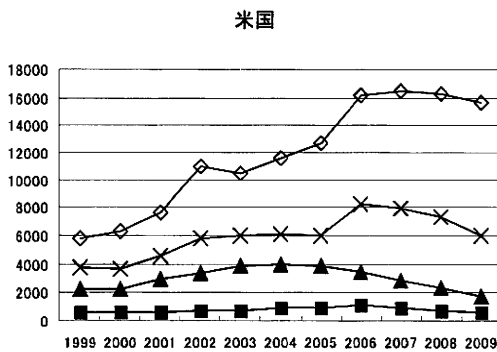


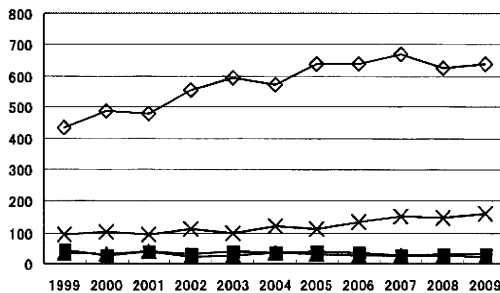
図 2. HIV 感染者新規報告数国別年次推移

2. 米国

米国の HIV サーベイランスは、大きく変化した。2010年6月に2008年分の報告書が、HIV Surveillance Report として、CDCより発表された。米国の HIV 流行状況を俯瞰する報告書である。この報告書の特徴は、年ごとの報告件数ではなく、HIV 感染の診断により重点をおく形になったことである。このようなサーベイランス体制の大幅な改正の背景には様々な要因があるが、特に次の3つは重要である。①2008年4月現在、すべての州において名前に基づく匿名 HIV 感染報 confidential name-based reporting が実施されるようになったこと、②2008年に HIV 感染の定義が変わり、新しい疾病の段階分けが決まったこと、③ HAART 導入によりより多くの人々が長く健康な状態で生きられるようになり、エイズよりはむしろ HIV のサーベイランス強化が必要になったこと、である。今後は、この報告書を通じて、米国における HIV 流行状況を注視していきたい。

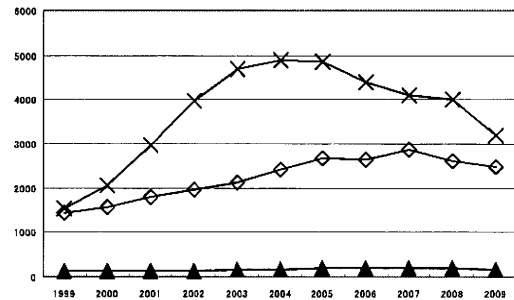


オーストラリア

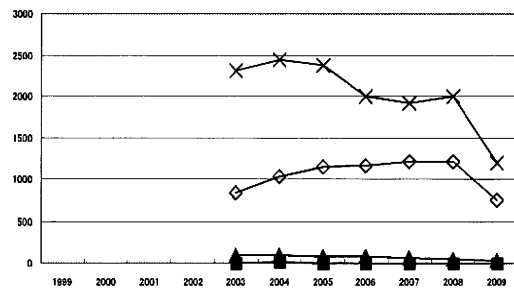


- x — 異性間の性的接触
- ◇ — 同性間の性的接触
- ▲ — 静注薬物濫用
- □ — 同性間の性的接触+静注薬物濫用

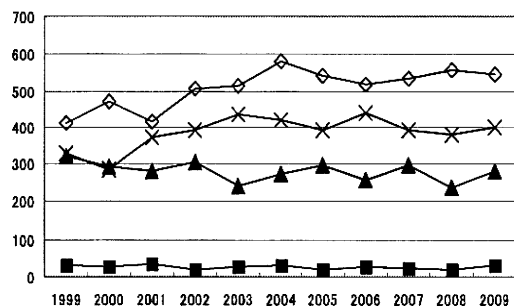
英国



フランス



カナダ



ドイツ

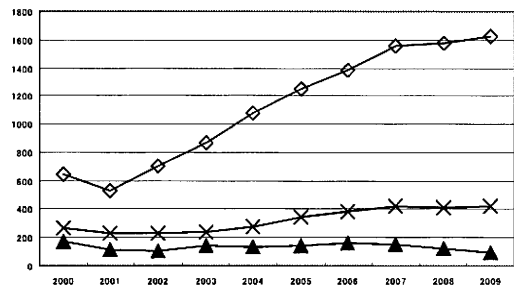


図 3. 先進国における HIV 感染経路別年次推移